

13
186
1



兼行

~ 13

186

1-4

文 已 已 文
化 已 梓 販

壯丹全傳



請
好
香
...

卷之十三
186
1

東坡先生

自叙

甚哉在人之好奇也。不啻僞葦，負空以奪人
之目。明遂至有以桃李梅杏之花，養之於窖中，烘
火而促其信，先時以出，之，以使人喫一驚者。雖異邦
亦復尔。故清人有十月中旬進牡丹之句。吁！
凡夫拙劣之手，焉能得奪造化微妙之巧乎。甚

明山

明治廿年十月十日于葉嶺痕齋贈

梅其果不精神其李花果不潔密矣雖其
稱也李也此其可以枯瘦而不可以富麗則已
若夫牡丹則不然色不國色則非也香不天香
則非也不富不麗則吾向何處而施王后之稱
焉如之何養之於宮中以驚人可為乎好奇亦甚
矣今春予有二紙據以撰浮牡丹全傳者始其

起草也書肆鳳來堂早認以為己之有時
來但之亦亦奇之事也予曰待時而可也書肆
不敢允促之殊急則予亦倉卒一筆以
授之且謂之曰是此浮牡丹其非前條
牡丹則予亦私信之唯恐未免堂牡丹之
謗是之為憾矣

浮牡丹全傳卷之一
鳳來堂藏

文化戊辰花朝於綠女深夏

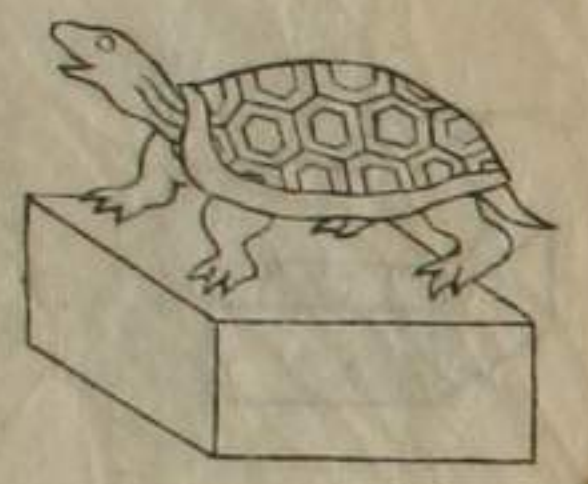
醒醒齋主人撰



浮牡丹全傳目次

此書摘玉厚之漢晉印章國譜顧氏印藪秦漢印統
宜和集古印史之印鈕式摹寫而附目次以為回號
每回之標名則集溫庭筠羅隱詠牡丹句

龜鈕號

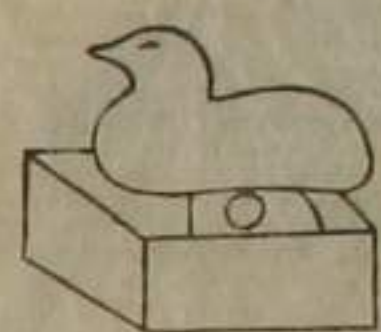


第一回

水漾晴紅壓疊波

曉來金粉覆庭沙

號鈕鳧



第二回

裁成艷思偏應巧

分得春光數朶多

號鈕邪辟

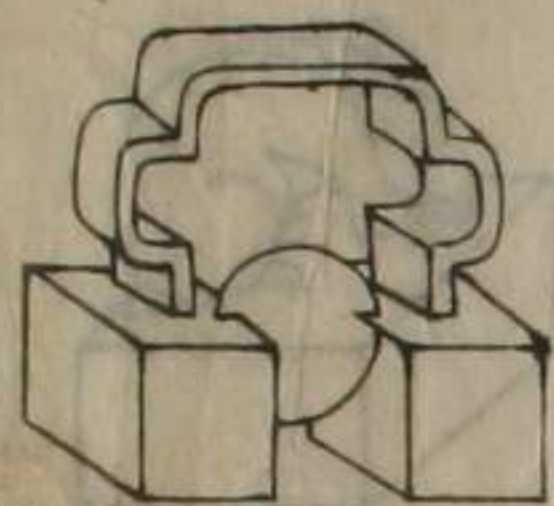


第三回

欲綻似含雙靨笑

正繁疑有一聲歌

號鈕印連



第四回

率堂客散薰垂地

想凭欄杆斂翠娥

號鈕虎



第五回

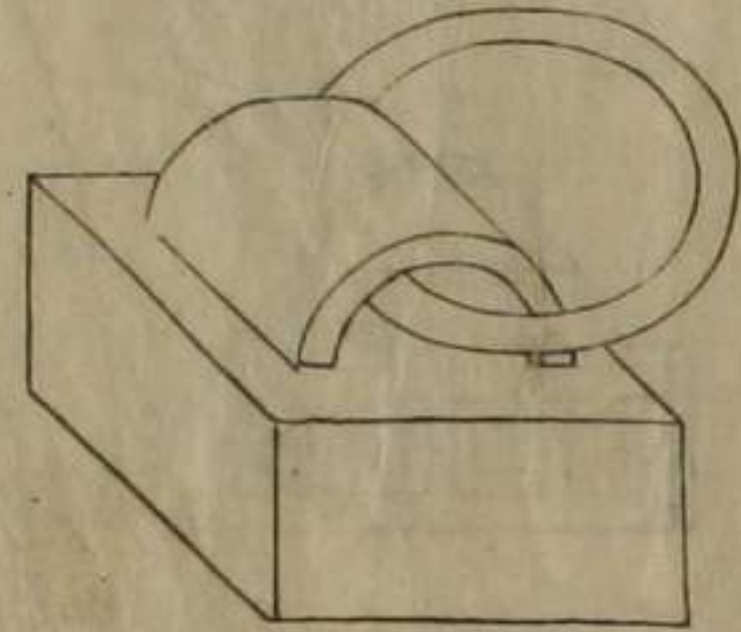
似共東風別有因

絳羅高捲不勝春

獅鈕鏡



獅鈕環



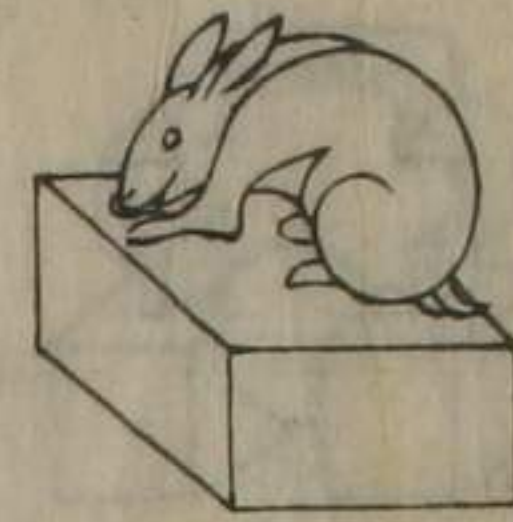
第八回

可憐韓令功成後
辜負穠華過此身

第九回

艷多煙重欲開難
紅藥當心一抹檀

獅鈕兒



獅鈕壇



第六回

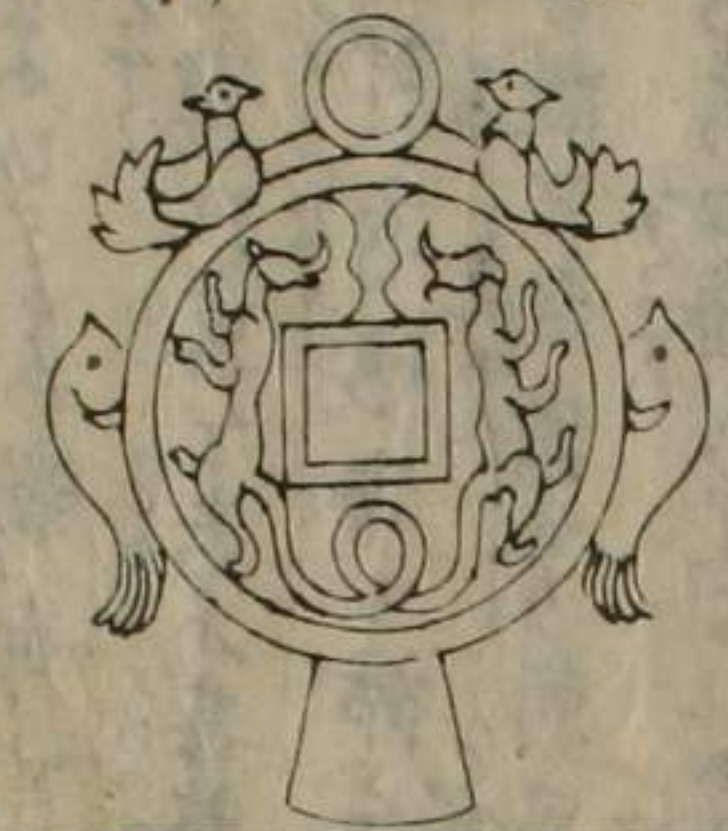
若教解語應傾國
任是無情亦動人

第七回

芙蓉何處避芳塵
芍藥與君為近侍



聯鈕錢

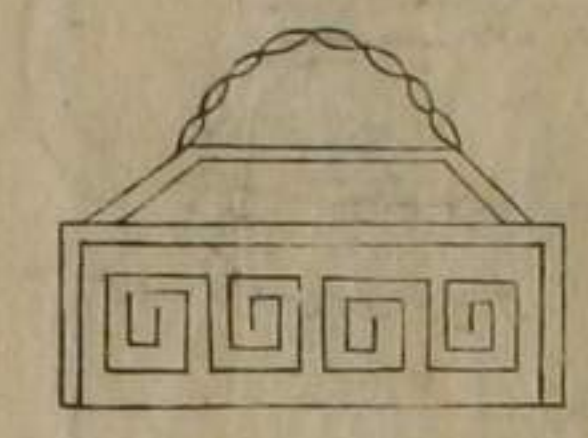


第十二回 目次終

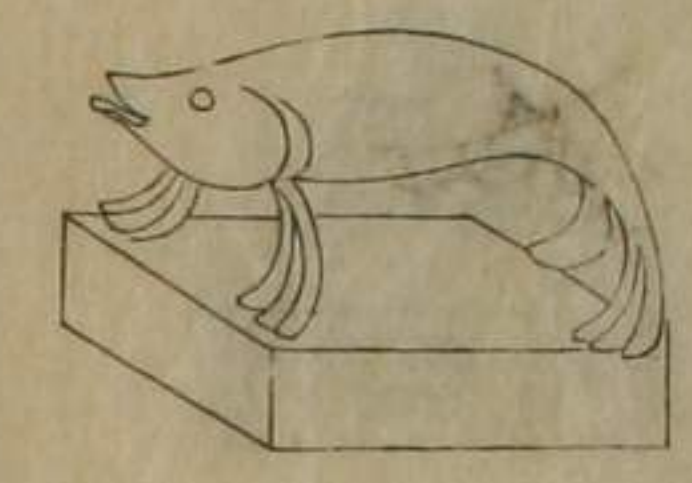
日一晚更將何所似

太真無力凭欄杆

聯鈕索



聯鈕魚



第十回

公子醉歸燈下見

美人朝補鏡中看

第十一回

當庭始覺春風貴

帶雨方知國色寒

小引

早咲の室の梅の造化の自持のあらざれば、色も深きぞ。梅土を作るも思ひ
 凝し氣を練りて、清濁の水影をばらし。黄昏の月も香をさむの妙に、
 事あらざれば、何處までも賈芳南枝北枝の邊邊とあらざれば、春風の到るは候と
 唐花の邊邊と好むは、あつらひの香を貯る小違あらざれば、元兒女子梅史の精像と
 見まひ、ひまの新奇と好む。繪様の奇も泥の文面埋めたる。文面埋めたるは、
 勸徳の意と失ふ。其故は此書文面と繪様と翻轉する。夏鮮うらぎ、
 奇計の有磯海の話と暗合せし。古画の怪の山海經の画精妖とあせり。水晶
 燈の説と翻案せり。頼風女郎花の事、正史に見えざれば、女郎花物語と云草紙
 あつらひの旧傳を、これに牡丹灯記と附會して一回改めし。義婦の魂魄魚龍

遷着せし事、續因果物語に見ゆ。化石谷の一條を造化の量知をくら
 ざりて示し、金蚕の奇病、夏子益が奇疾、方見ゆ。石麩觀音、杉の本草、細目
 食物本草、草小出せり。蛤蜊觀音の利益、觀音感應傳、詳を。觀音徑
 此小化を夏、八字拾遺小例、ある都其根、あつらひの原接枝のほろ、まうけし
 そりて、この書み、あつらひの、あつらひの、あつらひの、あつらひの、あつらひの、
 の花、いろは、色も香も、詠ふ、堪む、と、若直と曲、この人の心の、枝、
 たのむ、らん、便とも、つら、編者の、幸甚とせん

文化五年、辰夷則

山東京傳再識



鍾馗令馳惡魔圖

鍾馗令馳惡魔圖



倣雪村之筆意

鳥無聲兮山寂々
夜正長兮風淅々
魂魄結兮天沈々
鬼神聚兮雲幕々
日光寒兮草短月
色苦兮霜白

臨土佐光茂之圖



浮世冊全轉卷之一

口之八 鳳來堂藏

泉州堺
南之棚
魚商人
團七
黒兵衛
普門品
偈曰具足
神通力廣
修智方便
十方諸國土
无利不現身



越前三國小女郎

蛤蚧觀音

越中國細呂木長者婢女夕露





村婦水草の靈鬼

下 舟 天 宮 殿



泉州 堀遊 伏
一寸 徳兵衛

俠者釣船三撫

蘇乃時暇

生祇

乃え

えだ

梅翁宗因

瑶島

豹太夫見子

力太郎



萬古乾坤名姓重
千年地下骨頭香

印

印







伯州船上山古寺之怪



大鳥
嵯峨右衛門



小野の頼
前之妻
之怨

瑞島之巫

女郎花姫
之怨



三十六禽形像
第四蟹神
第五鼈神
第六魚神

越中国
赤波山
化石谷村婦雲根

石蟹

木葉石

世三傳之陰易尚稱經ハ
東方朔カ所著也大
畧先ツ其意ヲ数フ
第一声ハ即是甲十干
ノ以テレヲ教テ其緩
急ヲ辨メ以テ吉凶ヲ
定ムト云



西國ハ三所巡礼
信濃國ハ其ノ里
百姓烟物事ハ
あまのふみあつぬら
こゝろを
あまのふみあつぬら
あまのふみあつぬら

團七妻
於此

團七子
市松

浮世丹全傳卷之一



泥流の
腕と切りん
土山藪其角

丹後國由良邊西漢
泥六

村婦水草之
魂魄與蚊
還着

日十五鳥來堂藏

淮南子 廣莫風 之所生 也註曰 天神也 左傳 不才子 曰窮奇 註云獸 名能食 久云

窮奇圖



小説浮牡丹全傳卷之一

第一回 龜鈕蹄

江戸 山東京傳 編 山東京山 枝

話説入皇百三代後花園院の御宇長祿年間足利義政公の時代伯耆
 国と領世名和左衛門長知と号し後醍醐天皇隱岐国に逃れたる伯州
 船の上山小還幸の刺忠烈の志と奉りたる名和又太郎長年の末孫を
 あらとける其頃伯州會見郡文川小瑤島豹太夫の郷土あるを性
 質篤実柔和と讀昏好くあまり群昏と涉獵し詩以佐王歌を
 其頃都めて専おこりれつる香茶の技まもりて邊鄙ふまれり雅人

たつとさうちあひつれて兵学に通達一六韜三畧をかみひとらして軍畧の妙也
試みる武藝も頗曉しぬれども文学小比たにこころごとくおとれる所あり父母ハ
をぞおさまる其才年紀ハ初老ハ過妻ハ八雲といひて男女二人の児はもとそ
兄ハ穢之丞といひて十八歳小つと妹ハ八重垣とを分けて十四歳小なれと祖父
と三代当郡小任父の代ハ耕夫織婦ちどもあふとせつらひ牛馬の数もお不
習とるが豹太夫が代小到て農業のワグハハはたつた所持の田畠と人小あつて
おれ其物成以取て衣食の料と十分小富むとといども曾て質素専と
とれば足さる所あし一初穢之丞ハ学文武藝以修行のため三歳前心ま
た家僕弓助といふ者以つて都小のせせて今ハの地小富居せしむ八重垣
ハ国の守名和の館小出て内室の心小あひよく仕へぬよりて家小居者ハ唯豹

太夫夫婦と召仕の男女兩三人のこあり 初豹太夫が譜代の家の子小石生團七といふ
若者あまけり妻子以持庭子といふ者のごとく主人の構の裏小別宅以造て
住豹太夫が扶持といふとて妻子以親ひぬその妻と阿梶といふ初年の男
子ありと市松といひけるは阿梶が子のうへつたて一ツの説話ありと
初阿梶ハ当国名和の湊小住一義平次といふ貧者の娘ちつと一七
七歳の時父の爲小阿曾比の種小賣るぶと以豹太夫が父丹下その妻
以別て不便小おひ義平次小才慣れぬ金以手へて阿梶以親を
ぞ子あらむ小貫受て養育しけり其後丹下も亦まると義平次
由行方あらむとやりの初豹太夫が代小たりて年ごらも似あつけれは
阿梶以團七つらへし妻とあつて 以復以能記憶して此層以読

ざれば未だ到て解つたに愛あまざるあひて團七夫婦とも小格別
小大恩ある至人なれば万小心以もち誠心を尽して仕へける團
七曾て武藝を好み剣術柔術以字殊更大力を角力の上手なり
然も依り氣あまはかど村くの腕若者等瑤島の團七とておそむあひぬ
支人な侍するに似む書以読むの好むなり豹太夫の團七が死態ありて論
ぬ氣質を愛しけり唯酒癖ありて短氣なる更彼が二つの疵ありて
常く教戒はらふと夫の切むに愛あまると同国汗入郡武谷小大鳥塚
右衛門より小武士の浪人あまけり其出身の何方の人らか更以て近
頃当地に來りて武藝の指南してたつたと曾其業ふれと我諸国と
ゆぐと武者修行してころころ小在界廣くとくども我不敵なる者

一人もかゝる廣言と吐りぬりて国のかと名和の館のつとあり高禄よ
ありつきて威勢をあるひ粟花をきりぬりとのかしてあふ所われが名和の家臣
と見れば媚語ておれしとるふどおのづから彼がこゝを信じて名和の家臣寺
門人とありのあぬとてさぬ又名和の湊は庵八堂九郎とて二人の悪漢
ありつと家来の様ふして我家にやゝかひおさ彼等まらびきて近郷の
悪漢寺を過半門人とかゝりて威風のまさんことをりて何か人の
目醒とてかどの手柄して高禄ありつとよとせんにせんりのとふひつ打こぬ
さて当国船の上山は拍華寺より古寺あり此山へそのを後醍醐天皇
のりに玉座とまうけぬひし所ありにやう天皇崩御の後追福のたを
名和の一族等一字の禪院と建立して夢國師を開山と

寄附の田地おかく僧衆あぬさむらとて繁昌此寺ありらるる年月
とをさて後何のゆゑやありん空寺とあり僧衆とて退散し莊嚴美麗を
つくしたる山門殿宇全く破損して今唯狐鼻のそとかな見
近來此寺に妖怪を夕夜より異類異形のありて人とおぼる
あひるゆゑに山かせごとく者おそれて山よのぐど衣食の地をりあひて
甚難羨よかよよと嵯峨右衛門の者あり嵯峨右衛門とてきて
かくと名を自己膽氣の猛武藝の秀るをありつとき時こをうつと
遠は其變化を退治して諸人の睡を醒とべしと心中小の一手柄しく
高祿よあつづく便よせざと名ひつ一日身上おぼるに打扮彼鳩八堂九郎
等兩人の者を召具し夕日つとくころより家を立出く彼山ふと登ける

抑造船の上山とつへ北の大山つき時三方へ地僻小し根の地角は盤
頂へ天心は接遠望は雲痕と磨断し近者へ月魄を平春と深嶺幽谷
のうち常は雲霧とこめて奥の限をあらくしと実よ希有の高山なり
さるや小嵯峨右衛門寺三人此山のかりゆくにいとぬ小も人の往來とえ
るこええて尾花刈萱のたゑの草も人のさけりも高くおひのびる
うち依左右は押分て道をなれ木の下露は袖をぬりしつゆくよいまど
初秋おれと寒氣凝たる深山おれは山越の風いとさむく吹けりて笠のふらび
あつさやぶ谷の水音をるるにさこゆとありへめり下りてん殆けある岨を
はるひ峯の松風へ雲井小とありへめり上りてん岩根をひつをたる所を
越かどし辛しとかの古寺よつき明松をうけてして見るふ山門をうけて



扉左右ふたふせりのとさましく荒まど人裏よりてこまわり見ると
 鐘樓いどて津かひひつ。経閣ハむかしく苔蒸枯芦釋迦仏り膝を
 穿て雪嶺よゆ時のごと。荆棘觀世音の身を纏て香山とまり日よ
 似たり。諸天の懐中よ。鳥鵲巢と宮と帝釈の口中小蜘蛛網を結び没頭
 羅漢。這法身も災をまぬれを。拈背金剛神通われもわどこいびし
 天井の画龍。多々朽て筆勢と失ひ欄間の天人地小落てのりんとするよ
 衣多れ体よりり。殿宇方丈廊房庖厨とて破損し壁落床くらり
 樊子の糞坐禪の床をうづめ落葉のうらみ狐兔の踪と印し凄涼寂
 寞こしてつらなる小も変化のめくれ住べき光景より嵯峨右衛門旭八堂九郎
 寺三人仏殿の中央に坐とつ了鉢刀の鐺をうつらげ袖まろりて四辺を



ゆくとまひしつ変化のどろと今やくとまらなるがや時うらとこもよ松吹風
 谷の水音耳小ひくひめく虫の音ぐいとくきこゆりのを何のあやとも
 か一井日あまりの月もいそぐれり部とりたるに夜のうらなをあらりて
 嵯峨右衛門いひらるる時うらるるまで変化のどざり人のりのめぐるところ
 とりりあがりあひひ狐狸野猫のたぐひの所為ふて我勇氣よあされてつを
 あんざり何れもあれ手とむかしくかてん夏本意かしくひらる折しも
 方丈より仏殿へ通入行廊の床の下小物音と何れあんあやげあ
 りのつと飛そぬそんぞたるとひいて三人ひとくくらづきてるるよ
 大の融蝙蝠を追て出さるまれば打笑はるの所にうら又志をうく時うら
 りるに客殿の方火の光りやちりり人のりの色さこえりるあぞ

彼へまうく変化ありめと三人ともにかゝりに到り壁のうらむ所より
其裏を忍れ山賊とおぼしけりの四五人より棄ひ来り禪院より
わたりともおぼえぬ護摩壇の鉢のうらむ古き木仏を打入焼火しく尻
頭をあげ居り居り居り一人経匣を魚盤と切りて鬘を斬居たり
押のく月代の毛長く生のひ髭かりふて眼よりぞく身材たゞ者どもあり
嵯峨右衛門寺これを窺見て借へ変化ありあど山賊寺のかれ住り
ありありひつあひ一間へ立ちたる奥の方をうらむひも破れたる翠簾
かけたる所錦襦袢を身よまた濃くぬの袴をたてたか
紺青の髪をうらみどり太眉よかひぐらある上臈色青ざり願わたり
たるがをびたり下濃の九帳をたて唐錦の袴をたて螺鈿の脇息と軀と

靠て居たりいとらじき女の素薄衣着たりと二人まで高き小手に
頂又灯燭をとりしめ灯臺鬼とりの者の如くふして右左よとあおさつ
あべりありて折戸を打開て出来る者を見れば頬髭をうらみふり眼ざり
根のごちめりが萌黄薫の腹巻の上段熨斗目の小袖を著し丹地の
錦の袴をまき銅作の太刀をおひたる者摺箔の小袖を着たる手弱女の
年へ二八むりとおわしく芙蓉の暎楊柳の兒たをやらふしてあつらの眉
みごりの髪あざやうあつと情氣もあつ襟首つらして引立どらりてかの
上臈の面前小押伏氷あを太刀と抜て女のむあさく依さし通しりり
あつと叫てりへ苔しと鮮血さとかどむらつてあつりを紅く染むる
上臈へこれを見せいと奥ありけり打笑ふ時又怪哉女の胸より一道の

宇仕丹全傳卷之一

七鳥来

宇仕丹全傳卷之



七馬天宮

宇仕丹全傳卷之



心火閃々とりえわたり黄白の蝶わまご群いで外のうへ飛去ぬ嵯峨右衛門
此光景と見てかの上臈の何りのぞ髭男の山賊の首長あり彼寺此所
かれ住變化は拵作て人をかこ財宝をかまら婦女と奪めとあるべし
此所小ぢる賊人のあましとあかりひらうごりことあり彼寺を斬つたん
變化を退治したるおももるうにまさる手柄あり我輩小勢多れども彼奴寺
何をりの手段りあまきと大膽不敵の嵯峨右衛門旭八堂九郎は叫
三人ひとく刀を抜楯妻のごとくひらめじおめささけびて斬蓄るふ盗人ホ
これを見て一同まごつとつひ忽異類異形の変化とあるまづかの上臈の顔を
蝦蟇のごとく小変ト両眼は光を放て鏡は朱をそだたるふひらう鼻を
失て唇をさぬふひらうる灯臺とあり女ひとり蛟のごとくあつたうる

ひらうの夜叉のごとく顔ごある死したると見えし手弱女もむくくと起上り
肩を顔ふかひ象のやうなる長鼻を肩の中れたる所よりせう盗人と
見えし昔にも鬼とありて鉾りちてありくもあり枯木は日鼻つけよう
やうふありて躍るもあり鼻の顔もあつて藺苳かつ覆面したるもあり猿の
顔ふありて木の葉の烏帽子と著肩りたるもありしら梭尾螺のごとくも
あり守足河童のごとくもあり或は手足ありて頭あさあり或は片手片足のり
あり胸のあまにかけたる所のあり額蚌谷のそらの元たるあり見るく變化の
数ありくありあざらわさひれさあうさよとひて手と打からしめと笑つ
奥のふも走りゆく嵯峨右衛門等三人へ何れもあれのうとほと刀を打振て
追ひは變化ごもい奥深くうき一間のうらふ走り入ぬ嵯峨右衛門等

此一間のちちまを追来りたるまたちまは濕臭ひやうあり風ごと吹ひいて
 三人の鼻口入とひとくく三人とも五体もくもて此奥入ることありしと
 せんをさるればちちまありありの仕殿はひたえと総身の汗をぬぐひ息を
 つき居たり折し由行廊の方より素布を身ままとひ頂は灯燭をひき
 手は鉄槌をひら丑のさねまうでより人者のごとく打拵る女高豆下をたて



伯州船上山
古寺怪

ひくくと歩来。此女の顔をつつくえと。觸發のごとく。其跡は続て。
 藁りて造たる人形毛鎗を打ち炎をふとてしきたる。嵯峨右衛門あま
 心をさぐり。氣をふくと。汝寺化られるかと化よとひて。見居たりけるが。
 せめてこれを打ちむべいとちひ。やがて立わが。まづ高足下の女を目よ
 うけて。唯一打と斬つけたる。手ごたふにせむ。怒りけしとせ藁人形も
 こもにうせたり。又あむむく色くちと。さよと。拳をふり牙をむく。あじ。
 空をゆつとて居たる時。鳥飛りて鳴色。東方やあまのうらむ。
 朝日の秋氣はあひていとも変化のつぐることあまうらむ。かかれ佳ところの
 彼あまうらむ。所はあまうらむ。再人数をまうらむ。彼一間と破却して。
 正体を見わらひ。退治をまうらむ。三人つひは山をまうらむ。て家も飯りぬ。

さて瑤島貌太夫人ののりよりして。嗟哉在船の上山の変化を退治せん
とてやな手とひあしう去て飯しこ家ほしくまりひらる。彼拈華寺の後
醍醐天皇玉座乃跡亦建立したる寺とひひ。そののみ活仏とよむれたる。
夢因國師の開基なれば尋常のりの遠くかたききにあらざり。かろくむいも
わら変化あり。何ふまれ山持する者の愁とあり。あひびがたみあり。おの
やとてころろむべし。夜ハ妖怪の勢と得時あり。変化をころりむらに。日中
にまうとて。一日團七を具して彼寺に到り。山門經閣。仏殿。客殿。食堂。
浴室のらめぐりにりるまで。めづり見れども。爰ど変化のかれ住所とかがた
かし。何れ此所彼所と見りめぐりて。かのあきまりたる一間の口よりりる。不忽
一陳の妖氣と生じて。あしり盤旋りるゆ。貌太夫此と眼をつけ。い

團七れと見よ。此一室の裏より。かのごとく妖氣と発する。此ところこそ
まさしく変化の在所なれば。團七左ひり拙者此裏に入。鬼にもあれ
蛇にもあれ。眼にさへまらりあつた。かいつりみてりていべし。よれ一奥ふこと
いあれと。こゝをわけふり。貌太夫いあ。白日の形をあらうと。さ変化ふ
わし。何ふもあれ仔細又見さけて糸とひひ。かこいとして袖まは
腕をささりつ。うちふりてるるに。暗々こしてりのあやめもり。唯冷氣
身をおりて。恰も氷を抱が如し。両手をのりて。曲辺を探りるに。手よ
さる物もあ。たちまちうらりたる床の板を踏抜て。一つの穴のうらよ
落りぬ。此所へ格別小冷て。八寒地獄といひける所。あやとあり。さ
齒の根もあ。時又唐櫃のこた物手よさるぬと。これ何りのを

おのひつゝ小服こびやくの抱かかて穴あなをいせ。外そとのうゝに出でてこれと見みるに是これ乃すなはち
 経きやう櫃びあり。豹ひょう太夫たふ打うちびうひ櫃びのうらとわらなり見るに。濕しつ気けよわたりて。さう
 たるたる経きやう卷まきあきあるかゝに。一いち軸じやくの卷まき物ものあり。かりてに百ひやく鬼き夜や行ぎやう圖ずと
 びらくる書しよ風ふう。古こ代だいめさたりいそが。く開ひらき見るに。さうぐの妖怪やうき
 の形かたちを彩さい色しきとらへて。わさなる筆ふで意いをかへ。古こ雅が小せうて絶ぜつ妙めうあり。あま
 年としを経へるごんえて。或ある紙し魚ぎよのこころとさうあり。或あるさう破やぶとさう所ところあり。
 奥おくの方かたと見るに。藤ふぢ原はら信のぶ實さねの絵ゑありよ。奥おく書しよあり。これい后のち又また記しせし
 と見みゆ。さて此こゝ絵ゑの精せい夜やかゝ形かたちをわら。と小こ疑ぎか。とかりん折しやしゆ。
 大おほ鳥とり嵯さ峨が右みぎ衛ゑい門もん腹はら巻まきと着きる。譬たとへ手て懸けん楯たてとつけ。さうゆゆく打うち拵ぢゆう
 弓ゆみとさう箭やをい手て鉾ほこをつきからし。門もん人にんのさう膽たんふとさうりのごもを

浅草

六つ折下

暗い巻下

白母下



